

スオーミの国土と住民

山 口 源 吾

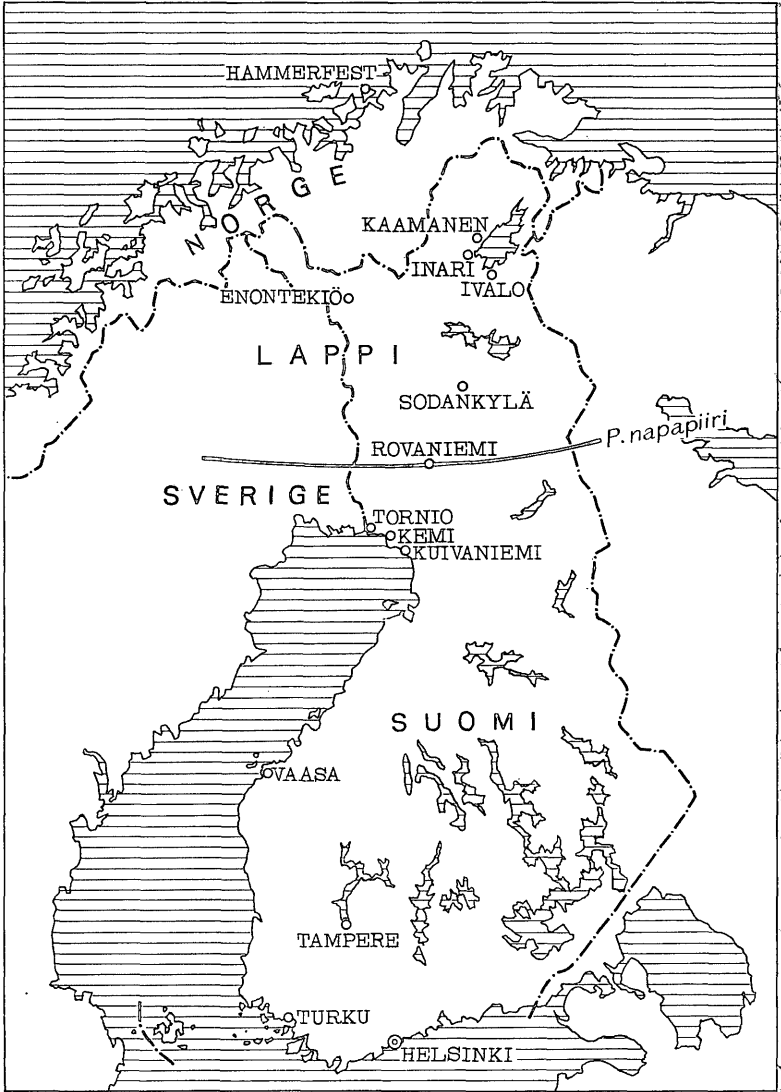
このレポートの目的

Osmo Thiel の「days in Finland」は純粹な地誌とゆうよりもむしろ景観写真集であるが、その初頭に“アイスランドに次いで、フィンランドは世界で最も北国である。にもかかわらずその気候は地理的位置が示すほどに厳しい極北的なものではない。メキシコ湾流は温水を南方の海洋から北大西洋に運び、そのための温暖さはスカンジナビアやフィンランドさえも居住に適するようにしている。フィンランドにおける夏の平均気温は約 15°C の高さで、最高は 30°C に達する。最寒の冬の季節は 2 月で上記の数値にマイナスの記号を加えたものに相当する温度が与えられる。

フィンランド半島は一様な寒い日々で知られていた。最後の氷期中、大陸氷床は北欧の全体を被っていた。その強大な力量はフィンランド景観の現在の地形を形成した。南フィンランドの砂礫の丘陵は退却する氷床の端の最も長く後まで残ったところの場所を印しづけている。氷床端の北はフィンランド湖沼地方に始まり、そこでは無数の湖沼と水路が北西南東に広がり、氷床の造った通路を現わしている。丘陵はその鋭い外観を失い、そして土の薄い層で被われているか又は完全に裸である。丘陵の円やかな頂は遠く北方に行くにつれてより高く隆起している。その最高度は北に遠ざかるに従って高くなるが、標高は僅に 1,000m に過ぎない。

さてしかしながら氷層が消失した後、正に 1 万年が経過した。大地は氷層の支

スオーミの国土と住民



記載地域の集落の位置図

配からのがれて隆起を更新した。隆起の最も速いものはボスニア湾岸に沿うもので、一年間に約 1cm である。フィンランドの国土地域はこのように緩徐ではあるが確実に隆起しつつあり、そして海洋は少しづつ後退している。……”

このようなフィンランドの気候と土地環境のもとに、アジア系の人々が居住して織りなす生活態様は、わが国の高冷地山村や同じく冷涼な山地気候を持つアルプス山村の生活態様とどのような等質性と特異性があるだろうか。

冷涼地域——その気候的特性は高標高に伴うものと高緯度に伴うものであるが——の土地利用に関する研究対象地域として1971年にはヨーロッパアルプスを選んだが、昨年(1975)はノルデンの千湖の国 Suomi (Finland) を選んだ。

目的は体験的資料の蒐集であるが、先のアルプス山村の経験が1ヶ月半にわたるのに対してこの度は身体的理由その他で僅にその半ばに過ぎない。従ってこのレポートは研究論文とゆうよりも単に Suomi の見聞記に過ぎない。

首都ヘルシンキ

ヘルシンキは6万の湖沼群を持つ Suo (湖沼) の国の首都である。

スウェーデンのストックホルムを夕刻6時に出航すると翌朝9時には町の南港 (Eteläsatama) に着くとゆう時間距離にあり、ホワイトタイガの様な淡い緑の木影に花崗岩の岩盤の露出した隆起海蝕台の上に市街はある。

石造建築の多い町は港も街路も清潔で瀟洒^{しょうしや}である。南港に近い Norra esplanaden に代表されるようなプロムナードは両側に車道と歩道の両方があり、樺やプラタナスに似た大樹の下は市民や外来者に憩の場を与えている。ヘルシンキが1816年 Turku に代って首都となつてからの歴史はそう古くないが、1827年にはすでに大学を持ち、ヘルシンキ大学やフィンランド経済大学等では数少ないこの国のエリートの養成に努めている。また宗教建造物としての近代建築の大寺院 (Tuomiokirkko) はギリシヤ神殿を偲ばせ、ギリシヤ正教のウスペンスキー寺院の巨大な玉ねぎ状のキューボラや、市街地中央の岩山を利用した円盤状の寺院のタイバーランド教会の異様さは、ヘルシンキオリンピックスタジアム (Wäinö

スオーミの国土と住民

Aaltonen) や数多い記念碑と銅像などとともこの町の観光産業の対象物となっている。

北欧の町の多くはマーケット広場を持つ。ここでは野菜を中心に一部日用品が取引され、地方から来た人々には情報交換と社交の場となっている。南港に面した市場には早朝から近郊の農民が手押荷車に野菜や果物・花卉を積んで集る。一方海からは市場の西側の停泊所に漁師の船が並ぶ。八百屋や農民の屋台にはキャベツ・カリフラワー・大形の胡瓜・そらまめ・ポテト・にんじん・トマト・かぶ・小形のりんごや時には野生のオイチゴが見られ、その間に安価な衣料品や帽子の店まで見える。一方の岸边にはバルト海で獲れた鮭や鯨・かにやえびなどが船尾一ぱいに並べられ、魚屋では味付した魚まで売っている。市民は主婦や時に男までその日の食料品を買っている。試みに味付の鯨を買くと小形なのが4匹で僅に1.2マルッカで日本円の約90円相当である。なかなか美味である。参考までに果物の値段を示すと、トマト 1kg 7mk, オレンジ 1kg 2mk, 大形胡瓜 1本 1.2mk であった。

7月上旬、北緯 60° 余分の町ヘルシンキは午後11時になっても暮れない。11時半やや暮れかかるが屋外は明るい。まだ街路には車が走るが人影は少ない。ヘルシンキ中央駅前の Vaakuna Hotel の5階から北を望むとネオンサインが大分消えた街道りは「薄明」よりもまだ明るい。白夜である。

スオーミはその国土面積が 33.7km² の中面積国であるがその人口は僅に470万の小人口国である。そして1880年には都市人口は僅に20万で全人口の 9.3%に過ぎなかった。それが1950年には42%となり1960年には約50%に増大した。ヘルシンキは人口の都市集中の核をなし1950年には41.5万であった住民が現在では約70万となって、この国人口の約 6.5人に1人がここに住むことになる。

スオーミのサービスセンター網は稀薄である。それはこの国の稀薄な人口密度や第一次産業が首位を占める職業構成によるものであった。

戦後ヘルシンキがこの国のサービスセンターの核として特に重要視されるのは、スオーミ経済の急速の発達によるものである。多くの労働力を消費した林業は早

スオーミの国土と住民

くも機械化され労力需要は低下した。農業また然りである。そして1960年代の失業者群の増大を招いたが、その頃から急速に発達した工業とサービス業務はこれ等人口を吸収することとなった。かくて農林地域では人口減少が起り、都市人口は増大した。

このためヘルシンキを中心にスオーミの南西地方では臨海地域に衛星都市の建設が計画実施されつつある。

ニュータウン タピオラ

ヘルシンキ中央駅西側のバスターミナルからは60に近い系統ルートがあって、タピオラ行のバスを探す外来者は約30分を空費するほどである。バスは郊外の緩やかな起伏の氷河堆積物の丘を西方に2～3上り下りし木立の間に清澄な湖を眺める頃、僅に15分で市の中心部に着く。そこにはケスクストルニと呼ばれる13階建のビルがあって、屋上の展望台からはタピオラの景観を一望することができる。ここを中心に住宅都市に必要なショッピングセンター・銀行・デパート・レストラン・教会・スポーツセンター・ヘルスセンターなどがあり、森林の中に深成岩の岩盤を削ってニュータウンの建設工事が進められている。

このニュータウンはヘルシンキの衛星都市の一つではあるが、日本のような大都市に隷属するベットタウンではない。

人口3.3万のこの新計画都市は居住地区の外に工業地区があって、住民の8割までが市域内に職場をもつ。緑地に恵まれた田園都市の景観を有する両地区には幾つかの行政的規制があって、地価の上限は定められ住民の建造物面積の制限もある。また工場は営業から派生する公害源となってはならないし、タピオラ完成時の工場数は2,000と定められ都市規模の限界が定められている。

ここでは開発に名を借りた自然破壊は厳禁されている。道路一つを例にしても、緩やかな起伏の氷河堆積物を越える時に丘をカッティングするようなことはせず、湖沼を埋立てて道路の短絡を計るようなこともしない。

住宅建設のためにもなるべく樹木を伐り倒さないようにし、周囲を高いコンク

スオーミの国土と住民

リート塀で囲うようなことはなく、低い生垣に花壇を沿え、開放的な住宅街が建設されている。

湖沼地方の中心都市タンペレ

スオーミは文字通り千湖の国である。現在湖沼の実際の数 は55,000と言われているが、概して狭長な水域は湖沼か水路かの判別も困難である。

スオーミの湖沼の過半数はモレーンが堰塞したものであるが、その他に **dead ice ponds** と言って水河の選択的侵蝕によって生じた凹所に氷期後も残留した氷河が消滅した後にできたものもある。湖沼群の配列は断層線の方に従う傾向があり、北部ラップランドのイナリ湖付近では特に顕著である。

湖は一般に浅く平均深度は5mから20mであるが、中にはより深いものもある。従って湖の総水量はそれ程大きくはなく、水面の標高も低いから水力ポテンシャルは山地国の比ではない。

高緯度地方の湖は低温で凍結期間が長くそのため水中の有機物の分解が遅い。中央ラップランドのタイガの中には褐色の水を湛えた腐植栄養湖が多く、排水河川さえやや黄褐色に見えて魚族には恵まれない貧栄養湖である。しかし南西部のボスニア湾岸では比較的気温も高いので富栄養湖も見られる。

湖沼の分布は非常に不均一であるが、ソ連との国境に近い東部の **Mikkeli** 州から南西部の湖沼群のある地域は湖沼地方と呼ばれている。そしてこの地方の中心都市としてタンペレがある。

タンペレはヘルシンキから北へ約200km、2時間半の時間距離にあり、人口17万、スオーミ第二の都市である。この町の開発は1779年に始まっているが、1820年スコットランド人による織物工場が造られてから次第に内陸工業都市としての色彩を有するようになり、現在は繊維のほか製紙・皮革・製靴・金属工業が発達している。工場立地の端緒は湖沼群に依存する豊富な軟水と水力の供給があり、政治的因子としてその工場に対する課税の免除があり、利潤が挙ったからである。

タンペレの市街は **Näsijärvi** (ネジ湖) の南岸のモレーンと一部周辺のシルト

スオーミの国土と住民

と粘土層の上に立地する。400の工場群はスオーミの工場労働者の40%を雇用しているとゆうが、広い湖沼群の水域とタイガに囲まれているためか、公害発生の話は聞かなかつたし、むしろ整然として文化都市の感がある。

タンペレはまた湖沼観光のツーリストセンターともなっている。ネジ湖岸の草地では極北らしく水泳よりも日光浴に親しむ人々の姿が見られた。

古都トゥルク

スオーミ湾とボスニア湾岸はこの国で最も農耕地の開けたところである。耕地は森林の間に開かれ、広い草地を有するが、処々に低い岩石丘があり、農村はモレーンやエスカーの上にいる。

トゥルクはこうした農耕地域をヘルシンキから西へ 200km、広軌道の電車で3時間の時間距離にある。スオーミ第一の農業地域の中心都市であるトゥルクの歴史は古く、11世紀にはスウェーデン人の植民が見られたが、13世紀に入るとフィン化した。その後トゥルクはこの国の首都としてフィン文化発祥の地となり、1816年ヘルシンキが首都となるまでスオーミの政治経済の中心地であった。そのためここには多くの史蹟景観がある。アウラ河口のトゥルク城は13世紀末の砦にはじまり、スウェーデン王政下の多くの物語りを残し、同じく13世紀末に建設された Tuomiokirkko (大寺院) はその巨大な尖塔が印象的であり、Henrik Gabriel の記念碑等と共にいま新しい都市の観光産業の対象物となっている。また文化センターとしてのトゥルク大学の建設はスウェーデン治下の1640年であり、スオーミ最古の大学で神学部と哲学部を有するが、キャンパスはそれ程大きくはなく、夏休中も図書館でもの静かに勉学する学生の姿が見られ、噴水と芝生と銅像を背景に建つ低い管理棟に書かれた大学名 TURUN YLIOPISTO の黒い文字は印象的である。トゥルクはスウェーデンに近いため、人口15万の中にはスウェーデン語系の住民が10数%居る。彼等は経済的実権も大きく、急速に発達した造船業と食品加工業の上でその活動力は注目に値する。トゥルクの近代的工業には Vuoksenniska 工場の電気金属精錬や郊外 Naanlali の精油工業があり、後者は1958年の創業で

スオーミの国土と住民

スオーミ化学工業の全生産の約半分を生産している。

伝統的食品加工業の最初の舞台は酪農業であるが、屠殺場や精粉業から多様化した食品加工業の核心地域は現在裕富な農業後背地を持つトゥルク工業地である。

トゥルクはまた砕氷船・トロール船・川ボート・はしけ・タンカーの造船業も盛んで、その輸出の大部分はソ連に向けられている。

またこの町はアウラ川の河口に位置して、この国の冬期貿易港として重要な地位を占めている。

新興工業都市ケミ

スエーデンの Haparanda との間にトリオンヨキの河川をはさむ国境の町 Tornio から列車で僅に 25 分の時間距離、耕地の稀少なタイガの中にボスニア湾頭の工業都市ケミがある。

基盤の片麻岩らしい石材を用いた石畳の坂道の多いこの町は、やはりモレーンの上にある。ポプラに似た街路樹を持つ町並はそれ程密集しておらず、時々建造物の間に空地さえある。市街の平面形は方形に近く、港湾部には少し埋立が見られる。

Kemi は1869年には人口僅に80人の寒村であったが、20世紀初頭には 2,000 余人となり、1930年頃にはケミ河口の木材加工業の中心として郊外の人口も加えて 13,000 人に達した。現在のケミはケミ川流域の水力発電と軟水と港湾改築によって 28,000 の人口を有する新興工業都市となって、新しくセメント工場が建てられ建設原料を提供している。しかし港は冬季約 5 ヶ月間も凍結し、砕氷船の使用もままならない。これは工業発達の上で大きな支障条件である。

タイガと林業労務者

スオーミは北ラブランドのごく一部を除いては殆んどが亜寒帯森林地域内にある。ここは暖地に比して樹木の種類が少なく、林床植物も密生せず、林相は単調である。

スオーミの国土と住民

最も卓越する樹種はスコット松で、エゾマツとカバがこれに次ぐ。シナノキやカシも見られるが、それ等の分布や密度は気温と土壌と地表水に支配されている。

ラブランドに多い高層湿原は森林の障害物であり、時には数mの高さに盛り上って未熟な泥炭層を構成する。こうした泥炭層を切り開いて排水しなければタイガの拡大は望めない。ラブランドでは大量の春の雪解水が夏の中ばまで地表に停滞して秋の降雨と共に湿原の増大を促すことが多い。貧弱生長林はこうした湿原と沼沢の境に多い。

筆者はこうした貧弱生長林中の排水溝を Sodankylä からロバニエミに帰る途中 Aska 付近の林地で見ることができた。排水溝は深さ幅共に 1m 余と目測され、長々とタイガを横切っている。

スオーミにおけるタイガの北限はスカンジヤよりも北上している。スエーデンの Boden からノルウェーの Narvik に至る車窓からの観察によれば、スエーデン側では北緯 67° 辺からすでにツンドラタイガとなり、68° に近い Kiruna はツンドラの中にある。スオーミのタイガは 69° を越えるイナリ湖北西岸まで認められるから、その北限界は約 1° 近くも北にある。これはスオーミ側の夏の気温がスエーデン側よりもロシアマスの影響でやや高いことと、山地スカンジヤに対してスオーミが低平であるとゆう標高に由来するものと思われる。

タイガはスオーミの第一流の自然資源であり、森林生産物と森林工業品は19世紀以来この国の主要な輸出品となっている。

丸太・角材・合板・家具・パルプ・紙のスオーミ経済への貢献は他の北欧諸国の比ではない。

北欧諸国と同様にスオーミでも林業はきわめて季節的な活動周期を持っていた。しかし最近では機械化作業が進行して伐採や輸送が周年活動化しつつある。しかし活動最盛期は今も冬季で、南部の農村からは北方に移動する季節労働者があり、春になると家庭に帰った。

スオーミの中部から北部には国有・社有・私有を問わず森林中にキャンプがあって数万の林業労務者に宿泊の便宜を与えている。材業労務者の中には終身あち

スオーミの国土と住民

らこちらと移動して、固定した組合組織に加わらない者がある。彼等は jätkä と呼ばれてラブランドの町にあらわれ、特異な風采をしている。

筆者はロバニエミのバスターミナルで、老妻を伴った jätkä に逢った。日当りのよい場所に座して煙草をくゆらかしながらソダンキュレ行のバスを待っていた。またその傍には大きなバッグに衣料をはじめ日用品をつめ込みんだ老女が、数人の仲間と話しこんでいた。

木材の輸送は伐採よりも複雑な仕事である。伐採した場所から遠い工場や港に輸送するためには、所有地の境界に沿う森林の縁につけられた道路や流筏のために河川や湖沼が利用された。馬櫃は普通 3~4 km の短距離輸送に使われるが、それは主として雪の道が最も経済的に利用できる冬で、小さな森林所有者自身によるものが多かった。河川と湖沼は今日木材を最も安価に大量輸送する重要な手段である。m³/km 当りの輸送費の比は水路の1に対して鉄道は 1.5、トラックは 5と言われている。

スオーミには約 4 万 km の自然流送路がある。それは深度を深めることと新しい堀を掘ることによって漸次連続するように改善されている。

木材は一流送季節中にその目的地に到着することが望ましい。北部スオーミではそれが普通二夏を要した。この間には座礁したり沈んだりする丸太があるのでロスが大きくなる。輸送費軽減のためにはばらばらで流したり筏にして流すよりは束流送がよい。湖沼を横断して輸送するには引き船が用いられるが、国土の平坦なスオーミではこれは経済的コストを高める。また最近の水力発電所の建設はしばしば河川流送の障害物となっている。

トラック輸送は流送河川の上流部で重要な役割を演じている。また流送路の乏しい地域から輸出用木材を港に運ぶためにも用いられる。ラブランドではしばしば木林運搬のトラクターを見かけた。

鉄道輸送は南西スオーミで多く見かけたが、タイガの中での鉄道網は極めて粗なので、その輸送量はトラック輸送には及ばない。

ラブランドの青年はトラック運転業に従事することを誇としているらしい。7

スオーミの国土と住民

月中旬のある朝、北緯 68°40' のイナリ湖畔イバロのバス停で会った4人の青年はいつでも木材のトラック輸送に従事する者で、職場行のボスの車を待っていた。寒い朝で彼等は各自のポケットからウィスキーの小びんをとりだして飲んでいますが、筆者の「君達は青年か」の問に対して、自分達は poika (少年) であると答えた。

北極圏下の町ロバニエミ

湖沼地方を過ぎてラブランドに入ると、ここは代表的タイガ地域となる。人口密度はせいぜい10人前後とゆう処であるが、そこはにこの地域のサービスセンターとしてのロバニエミがある。ここに到るまで小さな湖は至るところにあり。水路には時に水門が見られ、湖岸に木材貯蓄場があったり、パルプ工場があったりするの湖沼地方とは限らない。

タイガの中に開かれた牧草地や、庭に小さな菜園を持つ農家の数も少なくなる。

ロバニエミは北極圏直下の町である。七月中旬、午後11時半、ホテルの庭でシャッターを切った。あたりは昼間と変らぬ明るさで白夜である。

市街地は Kemijoki 西岸のエスカー? の上に立地し、現在人口 27,000 を有し、ヘルシンキの北 700km、ケミからは広軌の鉄道で 120km を1時半で達する位置にある。

ここは中世までラップの冬村のあった所で、フィンランド人の定住は16世紀に始っている。そして彼等はここをラブランドの開拓先端とし、タイガ開発は今日まで続いている。

第二次大戦中のドイツ軍による荒廃の跡は見られず、戦後の復興は目覚ましい。南部のケミからの鉄道は1928年すでに開通していたが、ケミ道とバルタ道 (Valtatie) の会合点にあるバスターミナルでもわかる通り、今やここはラブランド自動車交通の結節点となっていて、盛夏7月のラブランド観光の最盛期には、隣国や西欧からのマイカー族や観光客で賑っている。バスルートによれば、南の Kemi へ 114km, Ranua へ 84km, 東方の Posio へ 135km, Kuusamo へ 194

スオーミの国土と住民

km, 北部の Ivalo へ 293km, Muonioへ 239km, Kittila へ 158km, で, 人口 27,000の町にはふさわしからぬ, ターミナルの建造物の規模に驚く。

ロバニエミには木材工場のほか官衙・学校・新聞社・銀行・ホテルなどが完備し, 整備された公園・道路や住宅街, ラップの老人と娘がトナカイ文化を象徴するような土産物を並べる市場広場を見るにつけ, この町がラプラントの文化センターであることを知ることができる。

タイガの町ソダンキュレ

ロバニエミから北方への大衆交通機関はバスしかない。Ounasjokiの本・支流に沿って北上する道路は, モレーンやエスカーの砂利で舗装してあり, 乾燥すれば散水される。四周は一面のタイガで, 時たま牧草畑が見られ, 農家の所在は道路沿に置かれたミルク缶の置箱によって確認される。

他の一本の道は前者よりも東でケミエルピ方向に進むものがある。道幅は6車線, 時には2車線と狭まる。車輪型のマークを揚げた場所には小さな郵便局があり, 車掌は郵便配達手の役もする。バスはラプラントではインフォーマーションの手段ともなり, 個人宛の郵便物も配達する。これは農家の分布が極めて稀疎であるからであろう。車は約1時間毎に林床植物が濃紫色の花をつけた無地名のレストランで休憩する。

こうしたタイガの中にぽつんと置かれたのがソダンキュレの町である。

ソダンキュレは北緯 67° 30' に位し, ロバニエミから北 130km の町である。ここはソダンキュレ教区12,000の人々へのサービスセンターであり, かつてはこの地に北边防備の守備隊が置かれて, Torvinen には当時を忍ぶ開拓記念館がある。

町の規模はまことに小さく, どの方向に進んでも10数分で縦横断できる。シックセンターも見当らず, 櫛比する商店街もなく, 各建造物はその間に数mの間隔を置く。しかし一応のサービス機関は備っていて, 教区住民の日常生活には不便がない。

スオーミをその開発の程度によって, 文化地帯と自然地帯に二分するとこの地

スオーミの国土と住民

域は自然フィンランドと呼んでよい。夏期低温のため穀作は極めて稀で、耕地は殆んどが牧草地であり、農場の中にはトナカイ放畜地があり、フィンランド人がこれに従事している。

7月中旬の晴天の日試みにバスターミナルの屋外の温度計を見れば、朝3時に12.5°、8時16°、12時26°、14時20°、23時10.8°Cであった。この頃は最も高日期であり、しかも真夜の太陽を見る可能性のある地域であるから、正午頃には急激な気温の上昇があるが、太陽が北の空に輝き地平線に近づく頃には急激に低下し、人々はオーバーコートを要求する。

やや曇天で夕方降雨のあった日、盛夏であるのにホテルでは室内暖房し、毛布にくるまる程の寒さである。

ソダンキュレのバスターミナルも規模は大きいですが、バスの運転回数は極めて少く、乗客の数も少い。ソダンキュレから南方のロバニエミへは一日四往復するが、北方イバロへは周年三往復となり、より以遠のノルウェーのポルマクへは日二回となる。人口密度1人とゆう地域であれば交通量の少いのは当然である。

午後5時、町の通りには人影を見ず、時々車の北上するを見る。異国の観光客かノルウェーの故郷に帰る若人達であろう。夜中に出発する運転手が Grilli—Baari で夕食をとっている。

23時半、北の地平線すれすれの太陽を見る。雲が多いため光が淡くタイガは濃い紫色となる。

極北の町イバロとイナリ

単調なタイガの中を砂でよく整備された道路を北上すれば、標高はやや高くなり高度計は320mを示す。

ソダンキュレの北約170kmに Ivalo がある。河川は北流し北極海斜面である。イバロはイナリ湖の南岸に近い北ラブランドの小サービスセンターである。北緯68°40′とゆう高緯度のため早朝のバス停には7月とゆうのに皮の外套を着けた少年が居る。

スオーミの国土と住民

商店はノルウェーの Kirkennes と Hammerfest に向う道路の分岐点に散在し、小さな集落をつくっている。

この町のサービスセンターの特性は商店の入口に掲げられた看板で知ることができる。いま一資料としてそれを転記すれば、本道から東にやや環状に分布する商店は次の通りである。

まず入口のドアには。

AVOINNA 9.00—15.30	開店時間
LAUANTAISIN SULJETTO	土曜日 閉店

看 板	商品の種類
PUHJOLAN SANOMAT	ラップ衣装・鉢花
PARTURI KAMPAAMO	理髪店
KIOSKI PARTURI	書籍・タバコ・土産物
MAALI—KONEKOTO	金 物
PAULAVIRTA—K□ NI	?
KAHVI—KULMA	コーヒー店
KELLOSEPPÄ EEKO RIIPPI	貴金属品・時計
MARKET, EHÄYRYNEN	百貨店
IVALON AUTOHUOLTI	車輪・油類
KENKA—ASO	衣料・毛皮
KESKUSBAARI	バ ー
TL. GRILLI BAARI	食堂・バー
VAATETUSLIIKE	衣料・毛皮
FINNAIR	航空案内所
HALLI	百貨店
KELLO ja KULTA	貴金属・人形・時計
LAPINHAARIKKA	居酒屋

スオーミの国土と住民

E—RAUTA	刃物類
HOTELLI	ホテル
BAARI	バー
INARIN OSUUSKAUPPA	ガラス類
APTEEKI	薬品
KEMIKALIO, YHDYSPANKKI	化粧品・銀行
無名のヒュッテ	ラップ民芸品・毛皮

イバロは以上の24店で町の主核を構成し、若干離れた道路の西に数戸の民屋があり、北側に教会があった。

筆者はイバロを町と認めたが、現地の住民は Ivalo は Kylä (村) であると言う。これは職業構成による分類で Kaupunki (町) といったのに対し、人口・戸数による規模で村と言ったのであると思われる。ちなみに彼等はロバニエミはカウブンキであると言っていた。

ここから更に北に向うと道路ぎわにトナカイの仔2匹を見た。これは勿論野生種ではなく、付近のトナカイ牧場から柵越にきたものと思われ、すぐタイガの中に消えていった。

イバロの北約45分のバスによる時間距離にイナリがある。

イナリはイナリ湖南西岸にあるイバロと同程度の規模の集落であるが、湖岸にはカラフルな借バンガローがあり、ホテルやグリル・ガソリンスタンドがあるほか、トナカイの毛皮や角や細工品、ラップの民族衣装を売る屋台や土産物店がある。湖上に浮ぶボートは少く、小型の水上飛行機が観光客を下していた。釣客の姿は殆んど見えないが、上記の観察からこの村は夏期観光集落と思われた。ここはすでに北緯 69° に近い所である。

さらにノルウェーとの国境の町ウトスヨキまではバスで3時間半を要するが、タイガは次第に疎林となりタイガツンドラやツンドラと変る。途中カーマネンなど少数の部落を認めるが集落は極めて小さい。北極海岸に近いのと土地生産性が

スオーミの国土と住民

極めて低く祖先がゼーマンであることから、住民の中には船員となって活躍し、老後をここで過す者が出る。カーマネンで合った一老人はかつて船のコック長であったと言う。東京・大阪の港名も知っていた。

ラップとトナカイ

ロバニエミから北の主要道路には時々トナカイに注意の標式を見ることが出来る。これはトナカイ牧場の存在を示すもので経営者はフィンランド人である。

アルペンヴィルトシャフトとラップのトナカイ放牧との比較を試みてのラブランド単独エクスカージョンは失敗した。それは筆者のスオーミのラップに対する認識不足によるものである。

ラブランドすなわち **Lappi** は文字通り先住民族ラップに基くものである。しかしこの地域は既にフィンランド人によって支配され、ラップの占居地は殆んどなくなっている。

16世紀から17世紀にかけて、それまで北ラップからボスニア湾岸のポホヤンマーまで漁撈し、トナカイを飼育し、狩猟していたラップは次第に駆逐され、18世紀の中葉にはイナリ湖の南方まで後退した。そして現在はラブランドの腕とよばれるラップの北西、スエーデンとノルウェー間に突き出した部分にまで後退した。

スオーミの民族構成を見るとフィン系90%、スエーデン系9%と言われ、ラップは1%にも満たない。1950年代には2,500人といわれたラップは1960年には1,312人と計算され、その優越な地区を見出すことは困難になっている。

筆者はロバニエミから北、ソダンキュレ・イバロ・イナリの各地で現地人にラップの居住地を問うたが、いつも正確な答は得られなかった。折角に聞き得たトナカイ牧場はフィンランド人のものであり、ラップの考察には役立たない。

またラップの現地語を知らなかったことも障害であった。トナカイ牧場はしばしば牛と誤解された。スオーミでは **Renntier** では通じない。reindeer はもちろんである。指で角の形を示せば牛と誤認される。

poro (トナカイ) [?]sarvi (角) を知ったのは漸くイナリの土産物店であっ

スオーミの国土と住民

た。

10余年前スオーミをエクスカーションされた多田文男博士からは、Enontekiö 地方に居ると教えられたが、諸種の事情からついその機会が得られなかった。人口密度1人以下の地域、面積33.7万km²の地に1,312人のラップである。

Israel Ruong の「The Lapps in Sweden」には、ラブランドのラップの総計は約34,000でその内約10,000はスエーデンに、20,000はノルウエーに、2,500~3,000はスオーミに、そして1,500~2,000がソ連領に住んでいると記載されているが、現在のスオーミはその約50%に減少している。

ラップに合ったのはロバニエミの土産物店の老夫妻と娘、イナリで毛皮と角を売っていた老人だけであり、すでにフィン化していた。

ラップとトナカイはスカンジアの二国の方が機会が与えられそうである。1971年夏、Boden から Narvik に行く途中、ツンドラで遊ぶ子供2人を車窓から眺めた。

毛皮獣飼育業

トナカイの毛皮は国外からの観光客に珍重され、日本にも輸入されている。ロバニエミの一土産物店では日本橋の毛皮取扱店に直送している。

ロバニエミ・ソダンキュレ・イナリ等ラブランドの土産物店には必ずポロの毛皮がうず高く積み、毛皮専門の売店もある。価額は低廉で丈2m以上もあるものが80~150マルッカで売られている。

トナカイは毛皮を得るためのものではなく飼育目的はその肉にある。ヘルシンキで味ったその肉は脂肪が少なく、軟く淡泊で美味であった。

スオーミの農業で特性のあるものはミンクの飼育である。ボスニア湾に臨む Vaasa 近くの農家では専業者さえ現れている。

飼料は主としてバルト海で獲れる鯨であるが、近年飼料の需要が益々増大するので鯨を冷凍して貯蔵する店も出来ている。バルト海での漁期は春であるが、その頃にはしばしば鯨の漁獲量が需要を越えるので、その余剰の魚を貯えておいた

スオーミの国土と住民

めである。ミンク農家の立地は飼料の入手に便なことが第一条件であり、そのため Vaasa 近くの海岸にはミンク農家が集積する。

毛皮は国内での自己消費は少なくその大部分は米国に輸出されている。

フィンランド人の民族性

ある地域の経済形態や文化水準は複雑な要素から構成決定されるものであるが、スオーミのそれも単に平坦な低い丘陵の続く地形とか、古い地質とか、夏も冷涼な気候とか、亜寒帯性の植生とかだけによって生じたものとは思われない。それには強く住民の性質が作用していると思われる。

そこで以下若干の経験に基きスオーミの住民の民族性を考察することにする。

現在のスオーミに最初に生活したものはラップであった。フィン人の祖先は黒海沿岸から移動をはじめ約一世紀の頃バルトの地域から小集団としてスオーミに漂流を開始した。そして次第にラップを遠く北方に駆逐し、スオーミの南から北へと定住地域を拡大していったという。

こうした初期の時代からフィンは西方のキリスト教徒に接触し、ギリシア正教徒となっていった。

12世紀から約600年間はスエーデンの支配を受け、いままスオーミの南西部海岸地域にはスエーデン人の居住が見られる。

ナポレオン戦争後は約一世紀の間ロシアの勢力下に置かれ、一時独立したこともあったが、第二次大戦の混乱期を通じて複雑な隣国関係を生じた。

1917年独立宣言して独立国となったが、こうした歴史の過程で彼等の民族性は培われていった。

夏休中のヘルシンキ大学では教授等の多くは研究に出かけて留守で、職員には西欧語の語れる者は居なかった。学生はよく勉学する。偶然居合せた一大学院生は筆者のために終日研究室・図書館・書店・専門地図出版所を案内し、帰宅の遅くなるのもいとわなかった。

お礼に夕食を共にしようと言ったが、自宅まで一時間余の時間距離だからと断

わる。ワインをすすめても飲まない。ただ一杯のコーヒーだけ口にして分れた。

ワインを口にしない理由を聞いたら唯一言“私は学生だから”，と言われた。24，25才の大学院生がである。

休暇中の大学図書館での勉強態度は前述の通りである。

書店で購入した図書を日本に送るよう依頼し，計算書を見て驚いた。書籍代の10%が割引されている。スオーミでは大学人に対してはこれが慣例だと言う。大学図書館の売店で行われていることが，町に出ても行われている。またそれは国内だけのことでなく外国の大学人に対してもである。

このことでスオーミの人々の学問に対する敬虔な態度がうかがわれた。

駅前郵便局で日本に送る絵葉書にはった切手は各葉 0.2mk 不足しているらしい。交渉に手間どっている時，隣に来た一市民は不足分の切手を買ってだまって私の葉書に貼って呉れた。代金を返そうとすると，手で押し止める。理解し難い言葉の中に，フィンランド人の善意において，の意がうかがわれた。

ラッピからケミに帰る列車はヘルシンキ行の急行である。ケミ駅ではその標示を見落した。丁度停車した場所の前に長い貨物列車があったからである。このままでは又ヘルシンキ行きで，予定のケミ下車は不能になる。車掌に切符を見せると軽くなづいた。25分後列車はタイガの中の小駅 Kuivaniemi に停車した。窓からは不思議な顔が下車する私を眺めていた。そして25分後私は駅長に促されて無事ケミに逆った。

タンペレの駅に着いた時刻は夕方8時過であった。白夜の国でも駅付近に人影は少い。ホテルの予約はない。探そうとする私を同時に下車した老婆が導いて呉れた。私より高齢と思われるのに重いバッグを引いてくれ，高い石段を登って交渉までしてくれた。まるで帰省した子供をいたわるように。

ホテルは庶民的で14階建である。小さな贈物をすると多謝されて，もと来た道を引かえしていった。家はホテルとは駅の反対方向にあるらしい。

夜10時頃になるとホテルのグリルやレストランに若人が集って来る。ホテルの玄関にはゲートキーパーが立つ。室の一隅に机の片付けられた広間で音楽と舞踏

が始まる。

音楽はクラシックな民族音楽で、ジャズやマンボ調ではない。舞踏また然りである。その素朴と優雅さの交響は、自国では経験できないことであった。午前2時快い響が下からベットまで伝ってきて、いつか深い眠におちいていた。

町のスナックでガブ飲する人を見かけない。老若共々話にうち興じながら、コーヒーやソフトドリンクで時を過ごす人が多い。ローソクの火がゆれる下で。

23時30分、ソダンキュレ発のイバロ行のバスには数名の乗客しかない。若い人々が小さな声でフォークソングを口ずさむ。そのうち老人が国歌を歌い出した。哀調の中に何かを求めて前進する気分が加わっている。いつか全員合唱になっていて、リズムに足拍子をとりたいくなった。

「ラブランドの腕」の方向に 800m 級の山なみが望めたり、タイガの中に広い湿原が開けたり紫色のタイガに夜の太陽が見えかくれたり、水路が開けてタイガと交錯する美観の場所に来ると、運転手は車を停めて外国の男に写真をすすめる。その間乗客は外来者の行動を見乍らだまって待っている。

地域内に工場があっても雑踏はなく、いつれの町も清潔で静寂である。このことは人口密度だけで説明できるものだろうか。イタリアの特にナポリで見たような失業者の群や、異国人に物乞する者もない。ヘルシンキの港で、電車賃を乞うたのは有色の青年でラブランド人ではなかった。ケミの夜一緒に飲もうと筆者をさそった労働者はただ 1mk を受取っただけであり、ヘルシンキの市場広場で写真の背景になった少女はお礼に渡した珍しい日本貨幣さえも受取ろうとしない。

隣国人に対する評価は、ノルウェーはグート、日本人もグートだが、スエーデンはノーグートだと言う。ソ連に対しては口をつぐんで答えられない。これは独立までの歴史的背景によるものかも知れない。

この国の住民は列車内での食事も質素だし、必要以上の注文はしない。食後の果物も必ずしも採らない。

服装は清潔ではあるが、多色でも華美ではない。

以上の諸事例はスオーミの民族性の概念の抽象化に対する資料である。

スオーミの国土と住民

終りにのぞみ、アルペンヴィルトシヤフトとの比較のために高緯度で平坦なスオーミ行をお勧め下さったうえに、貴重な文献まで貸し与えられた東京大学名誉教授多田文男博士に深謝致します。

文 献

- Sømme, A. (1968): A Geography of NORDEN.
Helsingen Yliopiston Maantieteen Laitos, (1960): Suomer Kartasto (Atlas över Finland).
Granö, J.G. (1931): Die geographischen Gebiete Finland.—FENNIA 52.
Okoo, V. (1960): Physical and Human Geography of Finnish Lappland.—FENNIA 84.
Thiel, O. (1970): days in Finland.
Wsoy. (1971): Lappi tänään.
Ruong, I, (1967): The Lapps in Sweden.